

# 柏木英彦著：中 世 の 春

——十二世紀ルネサンス——

1976. 創文社 pp. 200 ¥1,200

今 道 友 信

## 思潮の渦巻き

中世思想の研究と言へば、久しく十三世紀と十四世紀とが中心であつて、これらに匹敵するのは、むしろ早い時期、四世紀五世紀の教父時代の盛期であつた。殊に哲学や神学が主題になるときは、教父時代のアウグスティヌスと十三世紀のトマス・アクィナスに大方の注意が向けられてしまふといふ傾向は、洋の東西を問はず目立つ現象であつた。それには然るべき理由がありはするが、ともかくこれら二人の巨匠は、時代的な隔りから比較せられるばかりではなく、思考上も対極者として扱はれ、中世全体はそれら両極の中に収められてしまふ静態的な均衡の千年であるかのやうに見あやまられてしまふほどなのである。それは多分個別研究の深さが強要した論理の楔の重さが歴史的展望を見失はせたからでもあらう。中世が決して等質の時代ではなかつたことは、それゆゑ歴史家の方から明らかにせられて来る。デカルトを史的に溯源して行つたギルソンが十二世紀ルネサンスを提言したのもその一例であつたし、近くは我が国でも堀米庸三が「革新の十二世紀」といふ副題をもつ『西欧精神の探求』といふ書物を編纂したことは記憶に新たである。哲学史の面でも、最近の顕著な研究情況として、十二世紀に関する文献が多くなつて来てゐるのを見逃すわけにはゆかない。それは思潮の渦巻く世紀であつて、アラビアに根ざしたイスラーム文化、ギリシア古典哲学、ユダヤ思想、人文主義、科学の試みなどが一時に競ひ出し、アベラール、ユゴ、アランなどといふ注目すべき人物の活躍した時代であつた。大学 (universitas) が制度として整へられて来たのも、この世紀の探求心が秀れた講義に殺到するといふ自主的な学習態度を前提とする。

最近筆者の目に触れただけでも、十二世紀に関しては、M.D. Chenu, J. Jolivet, R. Javelet, J. Pinborg, R. Thomas, S. Otto, J. Kritzeck, M. Watt らは、従来とす

れば見落とされてゐたこの時代について、それぞれの視点と方法から新しい研究成果をもたらしてゐて、V. Cousin や de Bruyne, Liebeschütz らが例外的に示してゐたに過ぎなかつた1950年代までには思ひもつかなかつたやうな清新な中世像を刻み上げてゐる。柏木英彦の手に成る本書もそれら秀れた最近の研究者たちの列に歩み入らうとする新鮮な仕事である。それは十二世紀の哲学や人文主義の研究としては、恐らく我が国では最初の本格的なモノグラフィーであらう。死の前の最後の講演を、東京大学で開かれた中世哲学会の第二十三回大会で行ひ、十二世紀の意義を力説した堀米教授が存命ならば、哲学の畑からこのやうな研究が生れて来たことをさぞよろこばれたであらうと、評者は感慨を深うするものである。

### 著者について

著者の柏木英彦氏は現在中世哲学会の委員であるが、嘗て1960年代学会の機関誌たる本誌の編集幹事として多大の労苦を惜しまなかつたことを会員諸氏は想起していただきたい。その際の細心な校正に於いて、他人の論文の註記でさへ一々原典との照合を心がけてゐたのを知り、評者はかねて氏のかかる学的誠実が稔る日の遠からざらむことを予感してゐた。その後記にもあるやうに氏は慶応義塾大学に学び、「精緻を極めた講義」(199頁)を行つた松本正夫教授の厳しい指導を受け、現在同大学言語文化研究所の助教授である。夙に十二世紀の研究者として期待せられてゐたが、中世全体についての基礎的知識の深いことは、箕輪氏と共訳したコプルストン『中世哲学史』などによつてもすでに裏書きされてゐるけれども、殊に十二世紀に於けるイスラーム文化の意義に注目してゐたことは偉としなければならない。識者の周知るところかと思ふが、現在イランで活躍中の黒田寿郎氏(慶応言語文化研究所助教授)とともに、コルバンの『イスラーム哲学史』を始め、ナスル『イスラームの哲学者たち』ワット『イスラーム・スペイン史』などを訳了してゐる点は、あらためて意識さるべきことであらう。恐らくここには同言語文化研究所の学問的な支柱であつた井筒俊彦教授(イラン学士会員)の影響もあらう。松本、井筒と言へば識者をして慶応大学を仰がしめた巨匠コンビであるが、その組合はせの全盛時代に両者から学びえた著者は幸せである。しかし、そのやうな幸せを享受しても、そこからこのやうな好著が生まれるか否かは、一に著者の資質と努力に俟つほかは

ない。敢へてホイジンハの『中世の秋』の向かふを張つて多少は気障な書名を以て立ち現はれたこの蕭洒な研究書には、恵まれた環境に育つた恵まれた資質の学者の苦心した努力が読みとられる。それはどのやうにであるか。

### 言語の射程

本書の構成は、前後の「緒論」「跋」を除くと、「人文主義の理念」「美と超越」「自然の発見」「形象と寓意」「西洋中世とイスラム」の五章に分かれ、そのそれぞれに、ソールズベリのヨハネス、サン・ヴィクトルのフーゴー、ベルナルドゥス・シルヴェストリス、リールのアラヌス、ペトルス・ヴェネラピリスが配され、著者白らが言ふやうに、「言語表現という人間精神の営為に積極的な関心を示している人物」(5頁)の中から前者4人を取り出し、ペトルス・ヴェネラピリスは「西洋中世のイスラム観という視点から」(7頁)論ずることにしてゐる。「本書の意図は、著者の関心を惹く原典をしてその精神を語らしめることにある」(7頁)から、その方法はその柔かな題名からは想像もつかない程緻密で、例へば第一章の「人文主義の理念」でソールズベリのヨハネスを扱ふにも、ホイジンハが人間像を浮き彫るのに対し、本書の著者は「主著『メタロギコン』により人文主義の理念を明確にしようとする」(5頁)。それはいかなるものであるか。著者はヨハネスの特色を「言葉、思考、表現の不可離の関係を強調する」(15頁)ところに見る。従つて eloquentia も表現の論理と考へ、雄弁術とは別のものとする(16頁)。著者によると、この eloquentia はキケローの影響下にあつて、叡智と徳とに結びつくもので、「人格と切り離し難い」(18頁)から、それは最も秀れた意味で、「言葉が精神の力である」(18頁)ことに根ざす。さて、もしこのやうにして、言語と思考と徳とが人格に於いて一であるとするならば、当然のこととして、徳の理性的育成とその稔りが哲学の主要関心事となるであらう。ヨハネスが「倫理学なくして哲学者とは呼ばれず、倫理学は美 (decor) をもたらすという点で他のすべてに優る」(29頁)と書いてゐるのを引いて著者は、哲学を「人格美を増していく営みである」(29頁)と説く。人間性の完成がこのやうにして美と結びつく以上は、問ひは自ら「美と超越」に向かはなくてはならない。そしてそれこそがまた、サン・ヴィクトルのフーゴーといふ副題をもつ第二章の標題である。

## 中世の美学

「十二世紀の精神的背景をなす美学を求めるならば、サン・ヴィクトルのフーゴーの名を挙げないわけにはいかない」(39頁)とする著者は、その点ではまさしくフーゴー研究者として令名ある R. Baron (*Science et sagesse chez Hugues de Saint-Victor*, 1954) と軌を一にする。著者はしかしバロンや E. de Bruyne (*Études d'esthétique médiévale*, 1946) らと異なり、「クルティウスからは反人文主義と言はれる」(47頁) ほど「芸術がとりたてて問題とされることもない……彼の美学はいかなる意味で重要なのか」(40頁) といふ問ひを立て、「彼の著作に散見される美に関する所説を……内的に関連づける」(40頁) のである。フーゴーは『ロマ書』の一の二十にある思想、すなはち非可視的な存在が可視的存在を介して知られる、といふ思想に立脚する。そして可視の世界に於いて重要な価値は美にはかならない。それゆゑ、「美は見えざるもの(神)の最も明らかな痕跡であり、……美的体験と美の観想とは精神の登高のための確かな出発点となる」(57頁)。そして、このやうな美は、広大さや有益と並んで、見えざるものが可視の世界に顕示せられる仕方なのである。それは「位置、運動、形象、性質において成立する」(57頁) が、美の根源は光の象徴を介して見えざるサピエンティアとしての神であることがその後十頁にわたってテキストを引きながら説明せられてゐる。そこまでの76頁の間に合計127の註が附されてゐることを見ても、著者の周到な準備がよくわかる。これら二章は中世の美学として極めてユニークな論文であるが、また著者はそれに止まらず、フーゴーが価値判断とその主体の類縁性との関係を考察してゐるのを見るや、「判断の確実度は自己の内面の在りようにかかつてくる」(69頁) ことを推論し、「価値判断の確実度は光源への回帰 (reductur) としての登高の高低に比例する」(69頁) と言つてゐる。この辺の消息を考へると、評者の見るところでは、その史的類似形態や体系的相関性などについて、二三の日本人の学者を引用すべきではないかと思ふ。美学史研究叢書の第一輯第二輯などや中世思想研究などを文献として註記する心がまへがほしい。それにふさはしい研究が育つて来るときには、それらを十分に意識するのは単に儀礼ではなく、学の常道であらう。それがなくては、いつまでたつても、日本の学界といふものが成り立ちはしない。

文人と学者——人文学の理想——

以下、「自然の発見」「形象の寓意」では著者はそれぞれ十二世紀の詩人哲学者たるベルナルドゥス・シルヴェストリスとリールのアラヌスの作品を読み進みながら、見事な解釈学的手法を以て文芸と神学とを結びつけてゐる。特にノルデン、マニッヒウス、シュトレッカー、クルツィウス、ホイジンハらの研究を顧みながら修辭学的考察を示すところ（157—161頁）などは評者の遠く及ぶところではない。「言語がなかば記号化し、ラテン語がイメージを喚び起こすことのない専門用語と化してしまう次の世紀」（160頁）は「寓意と形象による表現形式を認めない」（161頁）やうになり、「文人と学者は分断され」（161頁）るといふのは、言はば古典的教養の崩壊であるが、それこそが中世の新しい文化としての大学的著作であると見ることも可能であらうが、著者はあくまでも「自由とゆとりをもつ」（161頁）十二世紀に中世の生命が栄える春を見ようとしてゐる。

最後の「西洋中世とイスラム」ではペトルス・ヴェネラピリスを扱ふが、ここではかつてパリ大学で評者の同僚であつた稀代の秀才J・クリセクの著書が引き合ひに出されてゐたことは喜ばしいことである。ペトルスがサラセン人を攻撃するのは「武器によつてではなく言葉によつて、力によつてではなく理性によつて、憎しみによつてではなく愛によつて」（177頁）であるが、著者はここに十字軍の結成に狂奔した十二世紀の行動に対する時代の良心を見てゐるやうである。

著者自らが言ふやうに（5頁）、コンシュのギョームとアベラルドゥスが加へられれば更に完備したことは確かであらう。しかし、それは著者自身の将来への自戒の語なのであつて、我々読者としては、これだけ充実した十二世紀の思想史をうれば、先ず以て喜びとすべきである。

中世哲学の書物である以上、ラテン語は中世風の発音にすべきではないかと思はれるし、81頁の三行目「セネカは自由学芸」の次ぎには限定詞「のみ」があるべきであるし、それに類する小さな難点はないわけではないが、全体として豊かな古典的知識を裏づけにして、中世思想史の従来とは違つた展望を資料に語らせて浮き彫つた研究として、本書は大いに評価すべきである。本書が松本正夫教授の慶応大学引退の記念として同教授への謝意のしるしとして出版せられたことも、著者の人柄をしのばせるものであらう。